

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究（小・中学校）」
平成24年度委託事業完了報告書
【推進校】

道府県名	山口県	番号	18
------	-----	----	----

推進校名	山口県下関市立玄洋中学校	研究主題	I・II・IV型
------	--------------	------	----------

1. 重点課題への取組状況

(1) 授業改善

○かかわり合いのある授業づくり

- ・授業の中で生徒同士がかかわり合う活動を設定し、自分の考えを持つ力・人の意見を聞く力・互いの考えを深める力を身に付けることをねらいとして授業づくりを進めた。
- ・生徒が意見を書いた小型のホワイトボードを黒板に掲示して「見える化」し、それらを「分類」、「集約」するためにグループ活動を取り入れるなど、かかわり合いの場の設定をした。



○授業公開と授業研究

- ・全教員が2学期末までに1回以上、担当教科や道徳の授業公開を行い、授業者と参観者が板書の構成や授業展開などについて改善点を協議した。ワークショップ型の研究協議では、確かな学力を子どもたちに身に付けさせるための授業のポイントを見出し、教科の壁を越えて各自の授業改善にいかすようにした。
- ・道徳の授業研究では、道徳の「デザインシート（指導案）」の作り方、軸となる発問の設定の仕方などについての資料提供や授業提供が行われ、発問の設定や発問をもとにした生徒の話し合い活動づくりについて活発に意見が交わされた。
- ・各学期10日間程度の互見授業（互いの授業を自由に見合う）期間を設定し、授業改善のために教職員相互に授業アドバイスをを行った。

(2) 授業評価の活用

- ・生徒による授業評価を実施した。教科担当が評価の結果をもとに、板書の見えやすさ、教師の声かけの仕方など改善を図った。また、保護者対象の参観授業日や保護者が都合のよい時に授業参観できる学校開放週間を設定した。参観授業日や学期末に授業評価・学校評価をしてもらい、意見を授業に反映させた。

(3) 基礎・基本の定着と学習意欲の向上

○「スタディフェスタ」（学習意欲を高め、学び合いを生むための全校共通小テストの取組）

- ・小テストの1週間前に課題を生徒に提示し、1週間後のテストでは、全校生徒が共通の問題を解くという取組である。週ごとに教科（国、数、社、理、英）を替えていくようにした。
- ・学級の学力活性化係の呼びかけや担任のアドバイスなどを行い、学び合う雰囲気作りに努めた。課題提示からの1週間、生徒が課題意識をもって家庭学習をすることもねらいとした。

- ・小テストの翌日、成績が優良な学級を終学活で発表し、集会等で表彰した。学級が一丸となって学習に取り組むことで、学習意欲の向上につながった。

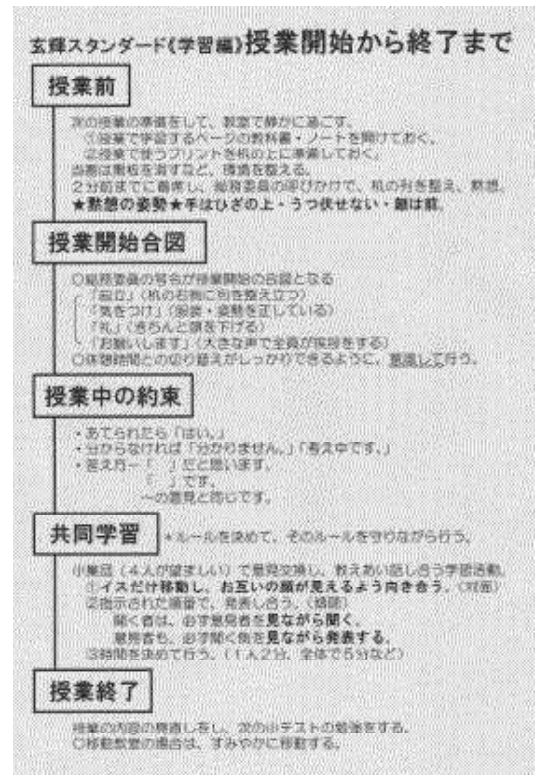
○「自学（自主学習）ノート」（家庭学習の習慣化をめざした取組）

- ・生徒が毎日、家庭で専用のノートに1ページ以上の自主学習をし、取組状況を教師が確認する。
- ・取組を徹底するために、年度当初の学活でノートの活用法についてまとめた『自学のすすめ』（右写真）と『先生からのアドバイス』を配付し、指導をした。
- ・小・中連携協議会でも「自学のすすめ」の内容を説明し、校区内の小学校にも配付することで、中学校でのノートの使い方を小学校高学年から取り入れるように、小・中が連携して学びの習慣化に取り組んだ。



(4) 学びの基盤づくり

- ・学級、学年間の指導の「ずれ」を防ぎ、生徒が同じ意識で落ち着いた学校生活を送ることが学習習慣づくりへの第一歩だと考え、学校生活や学習場面における約束事を「生活編」と「学習編」としてまとめた『玄輝スタンダード』（右写真）を作成した。小・中連携協議会で校区内の小学校教員にも内容を理解してもらい、中学入学前に小6に配付、説明することで中1ギャップの軽減に役立てた。
- ・学校生活の規律を教員同士で確認していく作業を通して、全教員で共通理解ができ、学校生活における目標の共有化ができた。



2. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 授業改善による成果

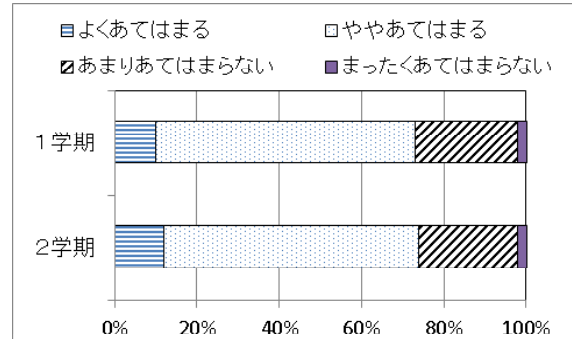
- ・生徒による授業評価では、教師主導型の授業よりもかかわり合い活動のある授業の方が「内容の理解が深まる」と感じている生徒が70%を占めた。
- ・学校評価では、「先生は授業が分かるように工夫している」という項目について、生徒の55%が「よくあてはまる」、38%が「ややあてはまる」と答えているのに対し、保護者アンケートでは「よく・ややあてはまる」という回答は68%で、残りの32%は授業改善の余地が十分あると感じており、保護者の学校に対する期待の大きさが明らかになった。
- ・教員が教科の違いを強く意識し、他教科の授業について全教員が同一歩調で協議することが難しい実情があったが、授業参観の視点を共通理解し、教科が異なっても確実に全員の授業で取り組むべき事が明らかになり、授業改善につながった。道徳の授業研究を

きっかけに協議が活性化した。互見授業において、効果的な取組を自分の授業に取り入れることや教科の壁を越えて意見を出し合うことが大切であると実感した。

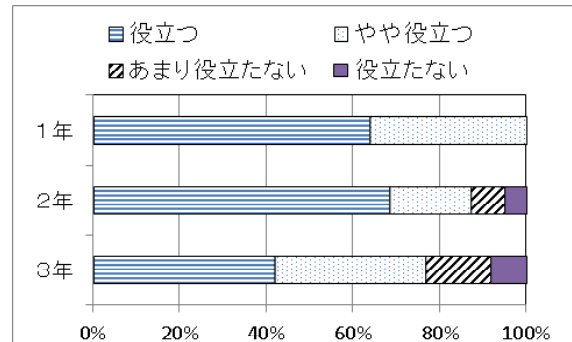
(2) 基礎学力の定着

- ・学校評価では、保護者は「学校は生徒一人ひとりに学習の基礎・基本が定着するように努力している」という項目については、グラフ1のように微少ではあるが、学校の授業改善を認め始めている。
- ・「スタディフェスタ」の実施により、学習意欲が喚起され、学級内での学び合いを促し、学んだことを試す機会を作ることができた。生徒アンケートの「スタディフェスタが家庭学習の役に立っているか」という項目では、グラフ2のように、生徒の大半が家庭学習の役に立ったと感じている。進級するに従って「あまり役立たない」・「役立たない」と答えた生徒が増えているが、その理由として「スタディフェスタの課題に縛られずに、自分で選んだ内容を学習したい」という前向きな意見をあげている生徒が多くあった。また、「計算力や単語力がついた」と感じている生徒は30%、「ややついた」が70%を占めており、基礎学力の定着に役立っていると言える。

グラフ1 「学校は一人ひとりに学習の基礎・基本が定着するように努力している」



グラフ2 「スタディ・フェスタが家庭学習の役に立っているか」



3. 今後の課題

(1) 授業改善

- ・全国学力・学習状況調査の結果の分析を該当教科の教員だけに任せるのではなく、全教員で検討し、確かな学力を生徒に定着させることを意識して授業技術を磨いていく必要がある。
- ・かかわり合い活動の効果は認められたが、授業で効率よく実践していくための第一歩として、かかわり合い活動のルールを全教員で再確認していきたい。

(2) 基礎学力の定着

- ・基礎学力の定着をめざした「スタディフェスタ」や「自学ノート」などの取組のマンネリ化を防がなければならない。そのためには、「やったらできた」という実感の積み重ねと、到達度テストなどでも「できた」実感が必要である。基礎学力が定着してきた生徒には活用問題を提示し、定着が不十分な生徒には個別指導をするなど、生徒が達成感を味わえるように、個に応じた指導が必要であると考え。そのためには、学習環境を整備し、教員と生徒、保護者が力を出し合い学校生活を安定させることが大切である。

(3) 家庭学習の習慣化

- ・確かな学力を定着させるには家庭学習の習慣化も重要な要素である。学年懇談会などを利用して、家庭学習の習慣化の大切さや自主学習の状態などを具体的に示し、学校と保護者と協力して子どもたちに学びの習慣をつけたい。